

空間を表わす前置詞 « SUR » の基本的意味⁽¹⁾
— *sous* との対比を通して —

Sémantisme fondamental de la préposition « SUR »
utilisée pour la localisation spatiale — à travers
la comparaison avec « sous »

南館 英孝

MINAMITATE Hidetaka

La préposition « sur » a des emplois assez larges qui s'étendent sur trois domaines : espace, temps et notion. Un dictionnaire français-japonais compte 22 emplois pour cette préposition. Nous essaierons, dans cet article, de pénétrer son mécanisme en nous limitant à ses emplois représentant la localisation spatiale. Pour ce qui est de l'espace, il est souvent dit que la préposition marque la position « en haut » par rapport à ce qui est « en bas », ou tout simplement la position supérieure : *la montre est **sur** la table, un chat est **sur** le toit*, etc. On remarque cependant des emplois qui ne correspondent pas tout à fait à cette définition : *le tableau est **sur** le mur, la mouche est **sur** le plafond*, etc. Cette observation nous amène à nous demander si c'est là la valeur sémantique primordiale de la préposition. D'un autre côté, les dictionnaires donnent traditionnellement la préposition « sous » comme antonyme de « sur ». On pourra admettre ce contraste *sur / sous* dans la mesure où « sous » marque la position inférieure. Il y a pourtant des exemples comme *un chat est **sous** la table, *la mouche est **sous** le plafond*, etc. qui contredisent, nous semble-t-il, la règle régissant les emplois de « sur ». Notre deuxième préoccupation est donc : la préposition « sous » est ou n'est pas l'antonyme authentique de « sur ».

Voici la conclusion à laquelle nous avons abouti après diverses

analyses :

1) la préposition « sur » représente, comme valeur primordiale, la localisation d'un objet sur une surface horizontale ou verticale, avec contact direct — il y a des cas néanmoins où un autre objet s'insère entre le premier objet et la surface. 2) la surface en question doit être, dans tous les cas, l'objet de notre perception quotidienne : un objet *sur* le sol, *sur* la table, *sur* le mur (la surface du mur que nous voyons), *sur* le plafond (le côté inférieur du plafond). 3) Pour le contraste *sur* / *sous* : a) « sous » est employé, essentiellement, pour la surface horizontale, b) « sous » peut être utilisé soit avec contact soit sans contact. Ce qui fait que les deux prépositions ne sont pas rigoureusement symétriques. 4) Dans la construction [A est *sur* / *sous* B], A a en général des dimensions inférieures à B : *la montre est sur la table* /vs/ **la table est sous la montre*.

0. 前置詞の「sur」は、空間・時間・観念の三分野にわたって広い意味を表わし⁽²⁾、ある仏和辞書では、22にのぼる意味が収録されている⁽³⁾。あまりに多岐にわたるために、その全容を明確にとらえるのは困難なほどである。本論では、その多様な用法を、「空間」を表わす場合に限って考察してそこに働くメカニズムを洞察してみようと試みる。多くの仏和辞典では、「sur」の見出しの最初に空間を表わす意味が扱われ、「...の上に」というように記載されている。仏和辞典でもたとえば **Grand Robert** では、**Marquant la position « en haut » par rapport à ce qui est « en bas »** (「下に」あるものに対しての「上に」という位置を表わす)と説明されているし、**Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse** でも「**la position supérieure**」(上という位置)を表わすと規定されている。われわれの感覚でも「sur」と聞けばまず「...の上に」という意味が念頭に浮かぶ。それだけこの意味はこの前置詞に密接に結びついて記憶されている。しかしながら、「sur」を使った文をいくつか集めるだけで、ことはそれほど単純でないことに気づく。例えば「sur」には同じく空間の中の位置づけに関する働きで **donner sur qc.** (...に面している)という表現があるが、

そこには *un livre sur le bureau* (机の上にある本) が表わす « sur » の意味はない。辞書の記述のように、前置詞が表わす広範な意味を細かくいくつもの項目に分けるやり方もあるが、逆にそこに働く様々な意味を包括的な視点から見て統一的に解釈するやり方もある。本論は後者の立場に立つ。

1) « sur » が持つ意味の広がり の 根源にあるのは、はたして本当に「...の上に」という内容なのであろうか。また多くの辞書で「...の上に」を表わすとされる前置詞 « sur » の対立語として « sous » が挙げられる。確かに « sous » は一般に「...の下に」の内容を表わしてはいるが、例えば上記の *donner sur qc.* に対立する意味を « sous » が表わすかといえ、どうであらうか。2) « sous » が « sur » の真正な対立語と言えるかどうか、再考する余地がありそうである。本論は、これら 1) と 2) の疑問を解明しようと試みるものである。

1. « sur » は「...の上に」を表わすか。

日本語の「そのコップはテーブルの上においてある」に相当するフランス語文は、おそらく次のものであろう⁽⁴⁾。

1. *Le verre est sur la table.*

確かに、「...の上に」の意味で *sur* が用いられている。以下の例も同様と思われる。

2. *Les livres sont sur le bureau.*

3. *La montre est sur l'étagère.*

4. *La mouche est sur la table.*

5. *La table est sur le plancher.*

2. は、それらの本が机の上にあること、3. はその時計が棚の上にあること、4. は蠅がテーブルの上にいること、5. はテーブルが床の上にあることを表わしている。これらの例は、あるものが「床(地面)あるいはそれと平行するある水平面」の上にある(あるいは、いる)ことを表わしている。ところが次の例はどうであらうか。

6. *Le tableau est sur le mur.*

7. *La mouche est sur le plafond.*

6. は絵が壁にかかっていることを表わしているのであり、これはもは

4 南館 英孝

や水平面の上を表わしてはいない。「床（地面）に対して垂直な面」の上にあることを言っている。7.は蠅が天井にとまっていることを表わしており、こちらは確かに「水平面」への位置づけではあるが、いわゆる「上に」ではない。天井の面の言ってみれば「下に」いるのである。それにもかかわらず、あいかわらず « sur » が用いられている。「下に」を表わすからといって、7.を « sous » で表現することはできない。

8. *La mouche est *sous* le plafond.

これらはどのように考えればよいのであろうか。

日本語文「その照明ランプはテーブルの上（方）にある」はフランス語ではどのように表現するのであろうか。

9.* La lampe est *sur* la table.

10. La lampe est *au-dessus de* la table.

この場合も床に対する「水平面」に対して「上に」ある関係を表わしているわけであるが、「 sur » は不可である。 *au-dessus de* がよしとされる。再び蠅の例に戻って、蠅がテーブルの天板の上にいる場合は、4. で見たように « sur » で表現するが、この蠅が今テーブルの脚にとまっている場合にはどのように言うのか。

11. a. *La mouche est *sur* la table.

b. La mouche est *sur* le pied de la table.

さすがに 11.a. は無理であるが、 *le pied*（脚）を明示すれば *sur* が使えることがわかる。ここでのテーブルの脚は床に対して垂直な関係にある。脚の「上に」と解釈できるが、水平面ではない。以上に見た 1. から 11. までの例の用法を総合して考えると、「 sur » の基本的意味は次のように規定できるのではないと思われる。

「床（地面）に対して水平である面、あるいは垂直である面に直に接している」ことを表わす。

ところで、床の上に絵が置いてあってそれが壁に立てかけてある場合はどうであろうか。この場合も垂直面への直接的な接触があるはずである。

12. a.*Le tableau est *sur* le mur.

b. Le tableau est *contre* le mur.

また例えばスコップが壁に立てかけてある場合はどうか。

13. a.*La pelle est *sur* le mur.

b. La pelle est *contre* le mur.

これらの例からもう一つの条件が見えてくる。すなわち、立てかけられた絵はその上部だけが壁に接しており、スコップにいたってはその柄の先端しか壁に接していないのである。その事情を考え合わせると « sur » の基本的な使用条件は次のように規定できることになる。

仮説 1 : 「前置詞 « sur » は、あるものが床（地面）に対して水平な面、あるいは垂直な面に直にかつ面として接触している」ことを表わす時に用いられる。

14. Notre chambre donne *sur* la cour.

この例は、われわれの部屋が中庭に面していることを表わしているが、冒頭に挙げた « sur » が空間を表わす二つ目の意味である「... に面した」の意味で使われた例である。この場合でもやはり部屋は中庭に直に面しているのであり、仮説 1 に合致している。

日常生活の中でわれわれが「... の上に」と考えるのは、おおむね 1. から 5. のような例の場合である。すなわち、あるものが床（地面）に対して「水平に設定された面」へ接触する場合である。しかしながら、ここまでの検討の結果、この意味は « sur » が表わす意味のごく一部であり、これがこの前置詞のもっとも基底にある意味を表わしているとは言いにくいことが判明した。むしろ統一的解釈による意味は、仮説 1 のように考えるべきであろうと思われる。

2. 仮説 1 をめぐる様々な問題.

2.1. 前節の検討を経てわれわれは仮説 1 を立てた。しかし « sur » の「直に面として接している」という規定については次のような反論が出るかもしれない。

15. a. ?L'avion vole en ce moment *sur* l'Océan atlantique.

b. ?Nous volons en ce moment *sur* la ville de Paris.

15.a. は、飛行機が今大西洋の上を飛んでいることを、**15.b.** はわれわれが今パリの街の上を飛んでいることを表わしている。インフォーマントの

反応は微妙で賛否両論があった。この場合は、飛行機（われわれ）と大西洋（パリの街）との間には、明らかに、直接的な接触がない。そこで次の例を見よう。

16. a. *?L'avion est en ce moment *sur* l'Océan atlantique.

b. *Nous sommes en ce moment *sur* la ville de Paris.

16.a. は、飛行機が今大西洋の上にいることを、16.b. はわれわれが今パリの街の上にいることを表わしているが、こちらは a., b. とも（ほとんど）不可と判定されている⁽⁵⁾。16. の場合は、a. も b. も *au-dessus de* を使うべきだというのがインフォーマントの意見である。15. と 16. の違いは、16. の文の動詞が *être* なのに対して 15. の文では動詞 *voler* が用いられている点である。15. と 16. の間でインフォーマントの意見が変化したのは、16. のように *être* を使って純粋に「位置づけ」をする場合にはやはり「*sur*」の使用を不可としていた人々が、15. のように *voler*（飛ぶ）を使って「動き」が出された場合に「*sur*」が持つ「直に接している」という制約が緩和されたと感じてこの用法を認める方に傾いた、ということなのではなからうか。さらには、周知のように、次のような表現がある。

17. a. L'avion survole en ce moment l'Océan atlantique.

b. Nous survolons en ce moment la ville de Paris.

17.a. は、飛行機が今大西洋上空を飛んでいることを、17.b. はわれわれが今パリの街の上空を飛んでいることを表わしているが、17. では *survoler* (x の上空を飛ぶ) という動詞が用いられている。「x の上を飛ぶ」を表わす場合もっとも一般的なのはこの 17. の表現である。15 a., b. は、この *survoler* を使った 17.a., b. の影響がはたらいて、一部の人が容認したのではないかと思われる。以上の考察を経て、われわれは仮説 1 の「直に面として接している」という特徴を今後とも「*sur*」の基本的意味としてとらえていくことにする。

2.2. 「*sur*」の特徴が「直に面と接している」ことであるとするとわれわれの考えに異議を唱えるもう一つのケースがありうる。それはつぎのような例である。

18. Vite! Partons ! La foudre est *sur* nous.

19. Les oiseaux planent *sur* la vallée.

20. les avions qui passent *sur* nous

18.は「さあさあ、出発しよう！雷がわれわれの上にあるから」を表わし、19.は鳥たちが谷の上を舞っていることを、20.はわれわれの頭上を通り過ぎる飛行機（群）という内容を表わしている。これらの場合はいずれも二者間に直接の接点がなく、明らかに間隔があいている。この意味で確かにこれらの例はわれわれの仮説に合っていない。しかし、このような例では、そこに作り出された状況から考えて、純粋な「位置づけ」が表わされているというよりも、そこに伴って他の要素が働いているように思われる。すなわち、程度の差はあっても、上からの「脅威」、「威圧」の内容が感じられるということである。われわれは、一般に、頭上にあるものを脅かすもの、あるいはのしかかるようで煩わしいものととらえる性癖がある。しかしこれは文自体が表わす意味というよりも、文が作り出す状況から生まれてくる二次的な意味であると考えの方がよい。この点、トグビー Togeby (1984) も、「sur」のこのような用法について、「制御」(domination)あるいは「影響」(influence)という関連が働いている場合であると指摘している⁽⁶⁾。18.~20.のような用例は、このように、単なる位置関係を表わすのではなく、そこに加えて上述の意味効果が意図されていると思われる。純粋に位置関係だけを表わしたい場合は、やはり (sur の代わりに) « *au-dessus de* » を用いることになる。したがって、われわれは、これらの例もまたわれわれが立てた原則に反するものではないと考えることにする⁽⁷⁾。

2.3. 今、テーブルの上に一冊の本が置いてあり、その上に携帯電話が載っていることを想定してみる。そのケースで以下の文を考えよう。

21. a. Le livre est *sur* la table.

b. Le portable est *sur* le livre.

c. Le portable est *sur* la table.

21.a. は、その本はテーブルの上にあることを、21.b. はその携帯電話は本の上にあることを、18.c. はその携帯電話はテーブルの上にあることを表わしている。21.a, b. が言えるのは不思議はないが、21.c. も言うことは可能であるという判定が出た。これは一見すると、仮説1に反するように見える。携帯電話とテーブルは直に接触していないからである。しかしながら、21.c. がそれほど奇異ではないと判断されたことから察すると、仮説1で言う「直に接触している」という条件はどうやら絶対的なものではなく、間になにかが入っている場合でも « sur » が使われることがある

と考えられる。ただしこの場合、テーブルに接して本があり、本に接して携帯電話がある。「sur」が間になにかが挟まっても使える場合でも、当該の三つのものは順次直接的に接していることが条件のようである。次の例も見よう。

22. *Dimanche dernier, nous avons pêché en bateau sur le lac.*

23. *On va construire un nouveau pont sur la Saône.*

22. は湖に船を浮かべて釣りをしたのであり、釣り人と湖の間には船の存在がある。それでもこの文は言えると判定されている。もっとも、湖と船と釣り人はそれぞれ直接的に接している。また、この例では釣り人と湖は間接的であるが、船と湖は直接に触れているということもある。一方、

23. はソーヌ河に新たな橋を架けることを話題にしているが、この場合には橋とソーヌ河との間には接点がない。河が大雨などで増水して橋梁に接することはありえないことではないが、それは常態ではない。ではなぜ

23. は言えるのであろうか。考えてみれば、われわれが橋を架けるのは、交通の妨げとなる河川を越えるためであり、こちらの岸から向こうの岸に行き着くためである。つまり橋は岸と岸を繋ぐものであり、川を挟んで両岸にまたがって建造されるものである。川の流れの両脇にはかならず岸(土手)があり、これが橋を支えている。すなわち橋とソーヌ河とは両岸を介して繋がっているわけである。以上のように考えれば、22., 23. のような例も上記の「直に接触している」という条件の緩和ということで説明できることになる。

24. 次に、木の枝にとまった蝉について考えてみよう。この蝉が枝の下の面をはって止まったとする。つまり、蝉は羽を下に向けて枝にとまっている様子である。その状況にいる蝉について次の文はどうであろうか。

24. a. *La cigale est sur la branche.*

b. *La cigale est sous la branche.*

24.b. は、その蝉は枝の下にいてということで、言える文であるが、この状況を表わすのに24.a. も容認される。

25. *La cigale est sur le tronc de l'arbre.*

25. は蝉が木の幹にとまっていることを表わした文である。幹は地面に対して垂直関係にある面であるが、そこにいる蝉も「sur」を使って表わされる。24.a. のように枝に下向きにとまっても、25. のように幹にと

まっぴいても « sur » が使えるのは、仮説1に規定したように、やはり水平関係でも垂直関係でも「あるものに面として直に接触している」ことに基づいていると言えよう。

2.5. 次は、雨傘が木の枝にかかっている場合を考えてみる。この状況を表わすのに以下の文はどうであろうか。

26. a. ?Le parapluie est *sur* une branche.

b. ??Le parapluie est accroché *sur* une branche.

c. Le parapluie est accroché une branche.

この場合にもっとも一般的な言い方は 26.c. のようである。ここでは雨傘が「(枝に) ひっかかっている」状況と認識されて、**accrocher** (x を y にひっかける) という動詞の助けを借りている。そうするとその動詞の性格上、前置詞は à が使われる。26.a. が言えると判断したインフォーマントは、雨傘が枝の「上から」かけられている点に注目したと考えられるが、やはり傘が枝に「接触して」いる点を考慮した結果と思われる。なお、26.b. はかなり難しいと判断されているが、極一部のひとに支持されたのは、**sur** が **accroché** と切り離して解釈されたからなのではないかと思われる。つまり、まずは「傘はかけられている」と解釈され、さらにそれはどこにか、ということで位置関係を規定するために「木に接して」と文が続けられたのだと解釈したのであろう。このような例でも、上か下かという判断に先行して「直に面に接している」という関係が重く見られたことが観察できると言えよう。

2.6. これに関連してもう一つ、あるものが糸で垂れている関係を考察してみよう。蜘蛛が木の枝から糸で垂れ下がっている場合である。

27. a. *L'araignée est suspendue *sur* une branche.

b. ??L'araignée est suspendue *sous* une branche.

c. L'araignée est suspendue une branche.

この状況をもっともよく表わすのは、27.c. のようである。ここでは蜘蛛が「(枝から) 吊り下がっている」関係と認識されて、**suspendre** (x を y から吊り下げる) という動詞の助けを借りている。そうするとその動詞の性格上、前置詞は à が使われる。27.a. が不可と判断されたのは、まずもって **suspendre** との繋がり (... の上に垂れ下がる?) においてであろうと思われるが、やはりこの場合蜘蛛が枝の「上に」いるわけでも枝に直

に接触しているわけでもないからであろう。もっとも、21.c. のように三者がそれぞれに連続して接している場合には « sur » が使えるケースもあったが、ここでは枝と蜘蛛とを繋いでいるものが細い糸であり、その関連を支えるに十分に足るものではないと感じられたのかもしれない。また 27.b. がかなり難しいと判断された状況の中で一部のひとに指示されたのは、26.b. と同様に、sous が suspendue と切り離して解釈されたからなのではないか。つまり、まずは「蜘蛛は垂れ下がっている」と解釈され、その位置関係に注目して「枝の下に」と規定したのだと思われる。

28. a. *La lampe est suspendue *sur* le plafond.

b. ??La lampe est suspendue *sous* le plafond.

c. La lampe est suspendue *au* plafond.

28. は、照明ランプが天井から吊り下げられている状況を表わしているが、この場合もやはり 28.c. が一般的である。28.a. と 28.b. に対するインフォーマントの反応は 27.a. と 27.b. に対する場合と同じであると考えられる。

27. この節の終わりに、「sur」と«à」との関わりを見ておこう。前置詞«à」もまた多種多様な意味を表わすが、中でも以下のような「空間」についての基本的な関係を表わすことは周知のごとくである。

29. Nous sommes en ce moment Paris.

30. Elle est allée la mer cet après-midi.

29. では、われわれがパリにいたことが言われていて、前置詞は「地点」を表わしており、30. では、彼女が午後海に行ったことが言われていて、「到達点」を表わしている。

しかし、次のような例では、「à」は単なる「空間」の規定を越えて«sur」と競合している。

31. a. Le chauffe-eau est *sur* la table.

b.*Le chauffe-eau est la table.

32. a. Le chauffe-eau est *sur* le mur.

b. Le chauffe-eau est au mur.

31.a. は湯沸かし器がテーブルの上に置いてあることを言っている。しかし31.b. は不可である。「à」は「地点」を表わすはずなのになぜこの場合には使用できないのであろうか。一方、32. は湯沸かし器が壁の上にあ

ることを言っているが、**a.** も **b.** も問題なしと判断されている。インフォーマントによると、**32.a.** は湯沸かし器と壁との位置関係のみを表わしているのに対して、**32.b.** は湯沸かし器が壁に取り付けられて使用可能な状態になっていることを表わしているという。つまり、「**sur**」が純粹に二者間の位置関係のみを表わしているのに対して、「**à**」は二者の間にある「機能」が成立していることを表わしているのである。次の例の場合も事情は同様であろう。

33.a. Mon appareil photo est sur le porte-bagages.

b. *Mon appareil photo est au porte-bagages.

33.a. が問題ないのは、私のカメラが荷物棚に載せてあるという位置関係を純粹に表わしているからであり、一方 **33.b.** が不可なのは、本来荷物棚がカメラのために設けられたわけではないからだと思われる。なお、ヴェンドゥロワーズ **Vandeloise (1991)** では、「**à**」が使われるのは二者の関連が「日常の決まった習慣」による場合である、と論じられている⁽⁸⁾。

3. « sous » の用法

3.1. 前節でわれわれは前置詞 « **sur** » について、その基本的な意味を探った。この節では伝統的にその「対立語」とされる前置詞 « **sous** » について検討する。この前置詞もまた空間・時間・観念の三分野にわたって広く用いられるのであるが、ここでは空間に関わる関係を表わす用法に限ってみることにする。まず、テーブルの上に本が置いてあって、その本の下に一枚のカードが置いてある状況を考えてみよう。この場合において次の文はどうであろうか。

34. La carte est sous le livre.

この文はそのカードは本の下にあることを表わすが、まったく問題がない。ここでは、「床（地面）と平行するある水平面」の「下に」ある関係を表わしている。しかも二つのものは「面として直に接している」。以下の例も基本的には同様である。

35. Ton permis de conduire devra être sous le journal.

36. La clé est, comme d'habitude, sous le paillason.

37. Attention! Le journal est sous ton pied.

38. Quelque chose de très précieux est caché *sous* la terre.

35. は、きみの免許証が新聞の下にあるはずなのであり、36. は鍵が玄関マットの下に置いてあるのであり、37. も新聞がきみの足の下に踏まれているのである。ここで話題にされる二つのものは、いずれも「床（地面）と平行するある水平面」あるいは「地面そのものがなす水平面」の「下に」ある関係を示している。かつその間には「直な接触がある」。38. の例は、何か貴重なものが地面の下に隠されていることを表わしている。ここでは地面と隠されたものとの間に若干の間隔があるようにも思われるが、「地面」はそのものが隠された土と一体をなしていると考えれば矛盾はない。

これに対して、「*sous*」には、周知のように、次のような用法もある。

39. Ton permis de conduire est *sous* la table.

40. Le garçon est juste *sous* le pont.

41. René est maintenant *sous* l'avant-toit à l'abri de la pluie.

42. A minuit, l'homme était encore *sous* le réverbère.

39. は免許証がテーブルの下におちているのであり、40. は少年が橋の下にいたのであり、41. はルネが今雨を避けて庇の下にいたのであり、そして42. も夜中なのにその男がまだ街路灯の下にいたのである。39 から42. までの例においては、やはり「床（地面）と平行するある水平面」の「下に」に存在することが表わされてはいるが、明らかに、話題にされる二つのものは「直に接触していない」。その間に間隔があるのである。以上の事情があるので、次のような例はいささか曖昧である。

43. Il y a un appareil d'écoute *sous* la table.

これは盗聴器がテーブルの下にあることを表わした文であるが、このままだと盗聴器がテーブルの下に（裏面に）取り付けられたのか、テーブルの下に（床の上に）置かれたのか、明確ではない。盗聴器がテーブルに取り付けられている場合には、次のように表現するようである。

44. Il y a un appareil d'écoute attaché *à* la table.

つまり、やはり「取り付けられた」ことを明示するために *attacher* (x を y に取り付ける) という動詞の助けを借りるようである。その際の前置詞はその動作の性格上 *à* になる。

45. Il y a un appareil d'écoute attaché *au* dessous de la table.

44. では盗聴器がテーブルに取り付けられていることは表現できるが、

これではテーブルのどこに取り付けられたかは明らかではない。45.では、テーブルの（天板の）裏側に取り付けられたことが言われており、関係が明確にされている。

以上の検討から明らかになるのは、「**sous**」の場合には二つの用法があり、当該の二者が1) 直に面として接する場合と、2) (直に接することなく) 二者が隔たる場合とがある、ということである。この点をもって、二者が「直に面として接する」場合にしか使えなかった「**sur**」と異なってくる。

3.2. 2.の節でわれわれは、前置詞 « **sur** » はあるものが「床（地面）と水平関係にある」場合も、「床（地面）と垂直関係にある」場合もともに使われることを確認した。

« **sous** » の場合もそうであろうか。そもそもこの前置詞に関して垂直関係を表わすとはどのようなことか、経験界の中で探してみても、当てはまりそうな状況が見つからない。垂直関係を表わしていた 6. と 11.b. の例文の前置詞を « **sous** » に置き換えて、仮に次のような例を作ってみても、対応してどのような関係を想定すればよいのかよくわからない。

46. *Le tableau est *sous* le mur.

47. *La mouche est *sous* le pied de la table.

46. は、もし壁の足元に置かれてあるのだとすると、*au pied du mur* と表現するのが一般的であろうと思われる。壁の裏側を表わしているという解釈も出てきにくい。壁の裏側は普通われわれからは見えず、もし *le mur* が「塀」を表わしていてその裏側というなら、*derrière* を使うであろうと思われるからである。47. も基本的には同じである。

ただし、ヴァンドゥロワーズ (1991) には、次のような例文が挙げられている⁹⁾。

48. Il y a un trou dans le mur *sous* le portrait.

これは、肖像画の下に壁にあいた穴があることを言っているが、この関係は一般的には « *derrière* » で表現される。このように垂直関係における「裏側」を表わすために « **sous** » が用いられることもある (もっともこの場合、壁ではなく肖像画の裏側である) が、多くの場合、「*derrière*」が好まれて使われる。

以上から、基本的には、前置詞 « **sous** » には、「床（地面）に対する水

平関係」における位置づけの用法しかなく、その位置づけにおける「下に」の関係を表わすということが言える。この点が「**sous**」が「**sur**」と異なるもう一つのポイントである。

3.3. 「**sous**」が表わす内容には次のようなものもある。例えば野原の真ん中に木が一本立っていて、その下に人がいるとしよう。

49. L'homme est sous l'arbre.

その人は、例えば、突然雨が降りだして木陰で雨宿りをしている。その人物が木の真下にいれば葉の茂った枝で護られて濡れずにすむ。しかしこの人物が木の根元から少しずつ離れていくと、ある時点で **49.** の文が言えなくなる。それはその人物が茂っていた葉が覆う範囲から出た時である。つまり雨に濡れるようになる時点である。これは **42.** のような例でも成立することである。すなわち、夜街路灯の下にたたずむ人は、その灯火が届く範囲内にいる間 (a) は **sous** が使えるが、次第に遠退いて行ってその明かりが届く範囲の外に出る (b) ともはや **sous** は使えなくなる。その人物が闇に消えるからである。

50. a. L'homme est sous le réverbère.

b.*L'homme est sous le réverbère.

これは「**sous**」が表わす意味というよりも、この前置詞が表わす意味効果であると言えよう。他の言語でも言えそうだが、「... の下に」という内容は「保護」や「庇護」の観念を伴いやすい。その結果、上記のような事態が起きるのだと考えられる⁽⁴⁰⁾。このように前置詞の表わす内容（関係）もまた比喩的な解釈の対象になる場合がある。

4. 認識論的考察

4.1. 前置詞「**sur**」は、**1.** で仮説1としてまとめたように、あるものが床（地面）に対して水平な面、あるいは垂直な面に面として直に接していることを基本的に表わしていたが、水平な面でのいわゆる「上下」ということに関しては、「**sur**」は「上に」を、「**sous**」は「下に」を表わす。ただし、この点に関して次のような例がある。

51. a. Le livre est sur la table.

b.*La table est sous le livre.

52. a. La carte de visite est *sur* le gros livre.

b. *Le gros livre est *sous* la carte de visite.

51.a. は、本がテーブルの上に置いてあることを言っている。しかし 51.b.(テーブルが本の下にある) は不可と判断されている。52.a. は、名刺が大冊の本の上にあることを言っている。しかし 52.b. (大冊の本が名刺の下にある) は不可となっている。つまり、どんな場合でも、AがBの上であれば、BがAの下にあるという言い換えが可能なわけではないのである。そこにはどのような条件づけがあるのか。まず通常のようにこの言い換えが可能なケースを考えてみよう。

53. a. Le calendrier de l'année 2005 est *sur* le calendrier de l'année 2006.

b. Le calendrier de l'année 2006 est *sous* le calendrier de l'année 2005.

54. a. Le manuel Tome 1 est *sur* le manuel Tome 2.

b. Le manuel Tome 2 est *sous* le manuel Tome 1.

55. a. Le pied de l'enfant est *sur* la tortue.

b. La tortue est *sous* le pied de l'enfant.

53. と 54. のような文は言い換えが可能な典型的なケースである。ここでは同じサイズのもの同士が「上下」関係を逆にして言われている。53. では、2005年版と2006年版のカレンダーが、54. では、教科書の第1巻と第2巻が話題になっている。どちらから出発しても言えるのである。55. では、子供の足が亀の上に載っていること(あるいはその逆)が話題にされているが、上下に関してどちらからでも言えるという判定が出ている。おそらくここでもこれらの二つがほぼ同サイズだという解釈が前提にあったと考えられる。

このようにものの大きさ・サイズという観点からこの問題を見てみるとどうなるのであろうか。上に挙げた51. と 52. の例に戻って検討してみよう。51.a. と 52.a. からは、[小さなものが大きなものの上にある] 場合は問題ないことがわかり、51.b. と 52.b. からは、[大きなものが小さなものの下にある] 場合は問題があることがわかる。さらに次の例を見よう。

56. a. La montre est *sous* le journal.

b. ??Le journal est *sur* la montre.

57. a. Le petit guide est *sous* la carte universelle.b. ??La carte universelle est *sur* le petit guide.

56.a. は腕時計が新聞紙の下にあることを言っている。しかし56.b. (新聞紙が腕時計の上にある) はかなり難しい。57.a. は小型のガイドブックが世界地図の下にあることを言っている。しかし57.b. (世界地図が小型ガイドブックの上にある) はやはりかなり難しい。56.a., 57.a. の例は、それぞれ「腕時計はどこか」、「小型ガイドブックはどこか」という疑問に対する答えとして言われた場合である。56.b., 57.b. も基本的にはこの同じ場面で言われたことを想定している。56.a. と57.a. からは、[小さなものが大きなものの下にある] 場合は問題ないことがわかり、56.b. と57.b. からは、[大きいものが小さなものの上にある] 場合は問題があることがわかる。以上の結果からわかることは、「*sur*」を使う場合も「*sous*」を使う場合も、A être *sur* / *sous* B とした時、[Aが小さくBが大きい] なら文は成立し、反対に [Aが大きくBが小さい] なら文は成立しない(あるいは難しい)、ということである⁽⁴⁾。これはなぜなのか。われわれが日常暮らしている一般的状況を考えてみると、その中に問題を解く鍵があるように思える。すなわち、われわれがあるものを話題にし(これを「対象」と呼ぼう)、それを何か別なもの(これを「指標」と呼ぼう)との関係で位置づけようとする場合、一般に指標としては対象よりも大きいもの(目に付くもの)を選択する傾向がある。そしてこれら二者間の大きさの差が広がれば広がるほどこの傾向が強まると言えそうである。部屋の中にある「本」を位置づける場合、それが置いてあるより大きな広がりをもつテーブルを相手に取るのは自然であるが、今度は「テーブル」を位置づけるのに、確かに下にあるとはいっても「本」を相手に取るのは、あまり自然だとは言いがたくなるのである(テーブルはその部屋の中にある、といった位置づけのほうがより自然であろう)。このように、対象を指標を相手に「上・下」に関して位置づけする場合には、(二者間で格差がつくように) 指標を目に付くものにしようという配慮がなされる傾向があるようである。

なお、対象と指標との関係は、単にそれらの大きさ(サイズ)だけによって決まるのではない。「*sous*」の場合には、「上・下」との繋がり、「表・裏」の関係が喚起され、それが対象と指標の関係を規定することもある。われわれの日常的な状況にあっては一般に「裏」側は見えないので、

56.b. や 57.b. は言いにくくなる。これらのケースは、隠されて見えなくなるもの（腕時計や小型ガイドブック）を指標にしているから言いにくくなるのである。また 36. では、逆に、小さいものが大きいものの「下に」置かれたために小さいもの（鍵）が見えなくなっている（隠されて安全になっている）のである。

4.2. われわれは、1. の節で «sur» が床（地面）に対して「水平な面」のみならず「垂直な面」である場合にも使えることを見た。ただ、われわれが空間の中にある平面を設定する場合、その面には両面があることを知っている。上と下ないしは表と裏である。例えば、4. の例文では蠅がテーブルの上にいることが言われているが、この場合はテーブルが作る水平面の「上」の面が話題になっている。決してテーブルの「下」の面ではない。ここからわれわれはもう一つの仮説を立てることになる。

仮説 2：「前置詞 «sur» は、あるものが水平面であれ垂直面であれ、日常われわれが習慣的に目にしている面に直に接触している」ことを表わす時に用いられる。

11.b. の例文でも蠅がテーブルの脚にとまっていることが言われているが、この場合は蠅とテーブルには直な接触があるとはいえ、11.a. のように *sur la table* とは言えない。この表現は 4. の例文と同様にテーブルの天板の「上」の面を指すからである。6. の例文では絵が壁にかかっていることが言われているが、この場合には壁が作る垂直面の「表」の面が話題になっている。決して壁の「裏」の面ではない。上記の 11.b.（蠅がテーブルの脚にとまっている）の場合も、脚が作る垂直面のやはり「表」の面（つまりわれわれに見える面）が話題になっている。そしてもっと興味深いのは 7. の例文である。そこでは蠅が天井にとまっていることが言われていた。この場合、天井が作り出す水平面のいわば「下」の面が話題にされている。だからと言って、8. の例文で確認したように、これを «sous» を用いて表現することはできない。ここでも、やはり天井の「裏」の面がわれわれから普通見えないという事情が働いている。

テーブルの「下」の面は、確かにその下にもぐりこんで見れば見えるわけであるが、日常的に目にする面ではない。壁の「裏」の面も同様であ

る。壁の裏は工事の時でもなければ普通見えない。天井についても、上記の通りわれわれが日常目にするのは天井の「下」の面である。天井の「上」の面は、いわゆる天井裏であり通常われわれの眼には触れない面である。

このように、われわれが屋内にいる時通常目にするのは、やはり床の上の面であり、テーブルのようなものに関しては天板の上の面であり、壁については表の面であり、天上については下の面である。

58. *L'abeille est sur la vitre de la fenêtre.*

この例は、(蜂がどこにいるかと問われて) 蜂が窓のガラスにとまっていることを言っているが、この場合ガラスが作る垂直面のどちら側にいるのであろうか。もし話し手が屋内にいるのなら、おそらく蜂は屋内から見たガラスの表の面(話し手から見て手前の面)にいることを言っていると思われる。一方、もし話し手が屋外にいるのなら、その時はおそらく蜂は屋外から見たガラスの表の面(話し手から見て手前の面)にいることを言っていると思われる。このようにわれわれが日常的にその両面に親しんでいるもの場合には、そのものに対して話し手がその時占めている位置関係によってどちらの面が問題になるかが決まるようである。このようにして「上・下」の問題も、われわれの日常の経験界からの規定を受けて(話し手の状況に対しての選択・決定によって)設定されていることがわかるのである。

5. まとめ

われわれは本論を通して前置詞 « sur » が空間的な位置づけをする場合の基本的意味を、適宜 « sous » と比較しながら探ってきた。前置詞が表わす広範な意味を、辞書の記述のように項目ごとに順次列挙するのではなく、その広範な意味の底に共通して見られるもっとも根源的な意味(あるいは関係)を掘り起こすことで明らかにしようと試みてきた。様々なことが明らかになってきたが、「sur」は決して伝統的に言われているように「...の上に」を中心的に表わしているのではなく、この前置詞が表わす情報の中で特に大切なのは以下の諸点である。

前置詞 « sur » が表わす基本的意味(あるいは関係)：

- 1) a. 空間における位置づけとして、当該の事物は、床(地面)に対

する水平面あるいは垂直面に「面として」直接に接していることを表わす。

- b. 水平面に接触している際は、一般に « sur » はその面の「上」にあることを表わす。
 - c. ただし、当該の事物（対象）と問題の面（指標）との間に他の事物が入ることもありうる（ただし、この場合、これらの三者は順に直に接していなければならない）。
- 2) その「面」は、水平面であれ垂直面であれ、われわれの日常的な知覚の対象になる面でなければならない。
これらは主に上述の「仮説1」および「仮説2」から出てきたものである。

前置詞 « sous » は、辞書の記述では多くの場合 « sur » の対立語とされるものであるが、本論の検討を通して、単純にそのようには言えないことが明らかになった。この点を本論のもう一つの結論として以下に述べておこう。

- 3) a. « sous » は、基本的には、上記の「水平面」に関して使う。
b. « sous » の場合は、当該の事物（対象）が問題の面（指標）と必ずしも直に接していなくてもよい（離れていることも表わす）。
そして最後に « sur » と « sous » の両方に関して言えることとして、次の点を付言する。
- 4) [A être sur / sous B] と表現する場合、一般的に A は B より相対的に小さいものである。

[註]

- (1) 本論文は、1993年度に外国語学部フランス語学科南館ゼミに提出された柳卓也氏の「空間における位置を示す « sur » の用法について」と題するゼミ論文に最初の着想を得て、それを発展させたものである。なお、ここでは「 « sur » の基本的意味」と題したが、前置詞はそもそも（意味というよりも）関連を表わす品詞であるので、「 « sur » の表わす基本的関係」とするのが適当であると思われる。
- (2) 時間に関する用法というのは、例えば *sur le moment* (ただちに)、

être *sur son départ* (出かけようとしている), *licenciement sur six mois* (半年にわたる解雇) などであり、観念に関する用法というのは、「主題」、「準拠」、「支配」、「抽出」、「比率」などを表わす場合である。

- (3) 『小学館ロバール仏和大辞典』小学館、1988, pp.2319-2320.
- (4) あるものの「存在」を表明する場合には、*Il y a A « sur » B.* のような表現にするのが普通であり、自然である。しかし、本論では空間における「位置づけ」を扱うので、基本的に *A est « sur » B.* の構成で例文を出している。これらの例文の前提となるのは、あるものについて「それがどこにあるか」という疑問である。
- (5) 16.a. のような *« sur »* の用法がありうると判断したインフォーマントが極少数いたが、その場合には一種の錯覚がはたらいていたようである。すなわち、大西洋の上空を飛んでいる飛行機が話題にされているのに、それを手元の地図上で指差しているかのように考えていたらしい。地図の上ならば、指が大西洋を指し示すことができる。
- (6) Togeby (1984) の pp.159-160.
- (7) 例えば、*Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse* の *« la position supérieure, avec ou sans contact »* (接触のある場合とない場合とあるが、上という位置) という説明の中の「接触のない場合」というのは、18.~20.のような例のことである。*Grand Larousse* にも *« ~, avec lequel il n'a pas de contact »* (...、それとは接触を持っていない) という記述があるが、これも同様の例を指す。これらの辞書は、「接触がない」場合と「接触がある」場合とをいわば同等視しているが、われわれとしては、やはり *« sur »* が表わす基本的意味は「接触がある」ことを表わし、「接触がない」場合は意味上の効果を狙ったケースであると考えたい。
- (8) Cl. Vandeloise (1991), pp.199-200 を参照。
- (9) 上掲書 p.208 を参照。このような用法の *« sous »* は、水平関係での「下に」の意味が垂直関係に投影された場合であるように思われる。
- (10) これに対して、*« sur »* の方もある意味効果を伴って使われることがある。本論2.2.を参照。 *Il portait des fardeaux sur ses épaules.* (彼は両肩に重い荷物を担っていた) *Nous avions au-dessus de nous de gros nuages tout bas et noirs qui menaçaient.* (われわれの頭上には

低くて真っ黒で脅かすような大雲がたちこめていた) こちらは、「**sous**」とは逆の「負荷」、「抑圧」、「脅威」などの観念が伴いやすいようである。

- (11) この点について、Vandeloise (1991) は「**sur / sous** は、一般に、**target** が **land-mark** より小さい場合」に使えらしている。P.193 参照。

[参考文献]

- ロベルジュ・メランベルジェ・南館他 (1983) 『現代フランス前置詞活用辞典』、大修館書店
島岡 茂 (1999) 『フランス語統辞論』、大学書林
TOGEBY, K. (1984) *Grammaire française vol.IV : les mots invariables*, Akademisk Forlag, Copenhagen.
VANDELOISE, Cl. (1991) *Spatial prepositions — A case study from French*, University of Chicago Press.